

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月18日現在

機関番号：55301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010年度～2012年度

課題番号：22520088

 研究課題名（和文） 「住む」ことを学ぶ
 —ハイデッガー居住論とモダニズム建築—

 研究課題名（英文） Learning to “Dwell”
 —Heidegger’s Topology and Modern Architecture—

研究代表者

稲田 知己（INADA TOMOMI）

津山工業高等専門学校・一般科目・教授

研究者番号：70221778

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は「住む」という事柄を、おもに20世紀初頭のドイツ文化を概観することによって、新歴史主義的に解明することである。いっそう具体的には、本件は哲学と建築との学際的研究なのであって、このような研究は現在もなされていないようだ。このことから、われわれはまず、国際的な住宅展（あの有名なヴァイセンホーフ・ジードルング）で「新たな住むこと」についてそれぞれ独自の見解を表明したミース・ファン・デル・ローエ、ル・コルビュジエ、ヴァルター・グロピウス、ハンス・シャロンといった、主要なモダニズム建築家について比較考察をおこなった。つぎにわれわれは、前世紀を代表する哲学者の一人であるマルティン・ハイデッガーを研究したが、そのハイデッガーは『建てること、住むこと、考えること』のなかで、われわれは住むことを学ばなければならないと強調したのだった。そしてわれわれは最後に、ハイデッガー居住論とモダニズム建築とを比較しつつ、現代社会にとって住むことの新たな可能性を見いだすべく努めた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the matter of “dwelling” in new historical perspectives, by illustrating the outline of German culture chiefly in the early 20th century. More specifically, this is an interdisciplinary study between philosophy and architecture, which seems to be still lacking at present. Thus we comparatively investigated, first, major modern architects, such as Mies van der Rohe, Le Corbusier, Walter Gropius, and Hans Scharoun, who had given their own views on “new dwelling” in the international housing exhibition (the famous Weissenhofsiedlung). Next, we studied Martin Heidegger, one of the philosophers representing the last century, who had stressed in the “*Building, Dwelling, Thinking*” that we must learn to dwell. Finally, we attempted to find new possibilities of dwelling for our present-day society, comparing Heidegger’s topology with the modern architecture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、思想史

キーワード：社会思想史、居住論、建築史

1. 研究開始当初の背景

(1)ハイデッガーはドイツ工作連盟主催のダームシュタット建築展(1951年)にさいして、『**建てる、住む、考える(Bauen Wohnen Denken)**』と題された講演をおこなった。ここで「住む」とは、大地のうえに、天空のしたに、神々の神聖のうちに、死すべき者としての人々とともに、住むことである。後期ハイデッガーが「四方域(Geviert)」と名づけたこのような居住空間は、現代人にとってあまりに非現実的であると考えられるかもしれない。しかし、この大地に住めなくなるかもしれない危機的状況があらわになるにつれ、「**住むことをまず学ばなければならない**」というハイデッガーの提言はますます傾聴に値するものとなってきた。その証左として、「住む」をめぐるハイデッガー論文が、近年、建築家によって2種類も邦訳されたくらいである。

(2)「住む」ないし「**居住論=トポロギー**」は、後期ハイデッガーのみならず、ハイデッガー全体の思想的核心である。居住論に関係したドイツ語文献では、O. Poeggelerの古典的論文 *Heideggers Topologie des Seins* (1969)を、新しいものとしては U. Guzzoni の *Wohnen und Wandern* (1999)を挙げることができる。フランス思想の関連では、かつてレヴィナスやバシユラルが「住む」についてそれぞれ独自の見解を表明したのが目立っていたが、近年、とりわけハイデッガー居住論を高く評価した仏語論文を書いている研究者として、G. Guest を指摘できるだろう。しかし、欧米のハイデッガー研究のなかで「住む」についての活発な議論がなされてきたとはいえない状況である。そのなかで異彩を放つのは、トポロギーという根本視座からハイデッガー哲学全体に徹底的な内在的解釈をほどこした、川原栄峰の大著『**ハイデッガーの思惟**』(理想社 1981)である。川原はすでに前期ハイデッガーの『**存在と時間**』(1927)を住居構造と居住様式を説くものと解釈し、ハイデッガーがヘルダーリンに傾倒するようになって、彼はいつそう根源的かつ本来的にトポロギーを問い続けたと把握した。

(3)本研究の申請者は、川原の学説を継承しつつ、『**存在の問いと有限性——ハイデッガー哲学のトポロギー的究明——**』(晃洋書房 2006)において、ハイデッガーのトポロギー的諸概念のいくつかは前期ハイデッガーの最終段階まで遡及することができ、政治の舞台に挺身したころの彼の政治理想とはトポロギー以外のなにものでもなかった、ということ明らかにした。政治的挫折によってトポロギーは痛手を受けたにちがいないが、ハイデッガーはそれを放棄するどころか、母親

が子どもをかばうように守り抜き育て上げ、この居住論の立場からナチズムを批判することさえおこなっており、ついに後期ハイデッガーになると、「存在のトポロギー」をみずからの中心思想として表明するにいたった。また、申請者は上掲書において、環境倫理学の所説と比較しつつ、ハイデッガー的な「住む」の根本動向は、四方域としての住空間を構成する四者をたがいに「思いやる(schonen)」ことであり、この意味で「住む=思いやり」は「**根源的倫理**」にほかならず、自然と人間とのあるべき共生が企投された「**未来倫理**」であることを明らかにした。

2. 研究の目的

(1)本研究は、ハイデッガー哲学の内在的な発展を追跡するものでもなければ、哲学・倫理学という専門領域の内部で比較思想を試みるものでもない。こうした研究なら、申請者自身がこれまでずっとおこなってきたし、今さら研究助成を申請する必要はないだろう。もともと「住む」という事柄はあまりに日常的で身近であるため、伝統的な哲学・倫理学の内部では忘却されてきた研究テーマだった。とすれば、もっと有効で斬新な研究対象の選択はないだろうか？

(2)そこで、本研究は新歴史主義的かつ実証的な広い視野から、ハイデッガー居住論をその「**時代**」という巨大な物語テキストから眺めてみたい。すると風景は一変する。ちょうど『**存在と時間**』が公刊されたとき、シュトゥットガルト近郊のヴァイセンホーフ・ジードルンクで、ドイツ工作連盟主催の住宅展が開かれた。ミース・ファン・デル・ローエ、ブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウス、ル・コルビュジエをはじめとして、世界各国から著名な前衛建築家が招待され腕を競った。会場には無装飾で白い箱形の住宅が建ちならび、さながら**モダニズム建築**の実験場の観を呈した。たしかに、「住む」ことへの新しい提案がここにはあった。

(3)**ドイツ工作連盟(Deutscher Werkbund)**——講演『**建てる、住む、考える**』もここで発表された——は、建築家ヘルマン・ムテジウスによって1907年に設立された団体だった。これとならんで、近代主義建築を語るうえで欠かすことができないのが、**バウハウス(Bauhaus)**である。バウハウスはグロピウスによって1919年にヴァイマルで設立された造形学校だが、ときの政情によってデッサウ、ベルリンへと移転し、結局はナチスの弾圧によって1933年に閉鎖された。バウハウスはその合理主義的・機能主義的なデザインがしばしば批判されてきたけれども、けっしてそれにつけるわけではない。従来の様式建

築（アーキテクチュア）の拒絶、あらゆる造形活動の建築（バウ）への中世ゴシック的な統合、芸術と技術との新たな統一、類型化による芸術と工業との融和、こうしたバウハウスの建築造形思想は、多様な理念が交錯する壮大な住居改革運動であって、それは、「技術の時代」に「住む」ことを考察するためには非常に興味深い。

(4)本研究の目的は、当時まさに勃興しつつあったモダニズム建築とハイデッガー居住論とを対決させることによって、「住む」という原事実肉薄することである。

(5)ただし、ハイデッガーが近代建築について言及するというような直接的な関係はないのだから、この両者について考えるためにはやはり補助線が必要になるだろう。そのため本研究は、20世紀初頭ドイツで流行した「技術の哲学(Philosophie der Technik)」を取り上げてみた。ハイデッガーの技術論に代表されるような、大哲学者の個性的な技術哲学をここで問題にしようというのではない。むしろ時代を映す鏡として、「ドイツ技術者連盟」や「ドイツ工学士協会」が発行した当時の機関誌に掲載された、今日では無名のエンジニアたちが抱懐した技術哲学に注目してみた。技術という時代精神の大きなうねりを考慮しつつ、本研究は上記目的を果たそうとした。

3. 研究の方法

(1)本研究は、「住む」ことを学ぶために、**新歴史主義的かつ実証的**な研究方法を標榜している。「新歴史主義」ないし「ニュー・ヒストリシズム」という術語は、本来は、文学理論の分野で使われる用語である。新歴史主義的な研究手法によれば、哲学的テキストの特権性は否定されるのであって、どんな天才的哲学者の作品であれ、歴史や時代といった巨大な物語テキストから読解されるのでなければならない。とりわけ「住む」といった研究テーマの場合、伝統的哲学のなかで主要な考察対象となったことはないのだから、この研究方法の有効性が期待できるだろう。このようなわけで、本研究はハイデッガー居住論をその時代から、当時まさに勃興しつつあったモダニズム建築との関連のもとで考察しようとした。そのさい重要となるのは、ドイツ工作連盟やバウハウスに関するさまざまな周縁的テキストを実証的にどれだけ収集できるかということである。すなわち、本研究計画を構成する要件は**研究資料の収集**であり、これにつぎる。

(2)研究資料の新歴史主義的かつ実証的な収集ということで申請者の念頭にあるのは、ベンヤミン、あの『パサージュ論』のベンヤミ

ンである。これは19世紀のパリをめぐる膨大な断片的資料集であり、ナチス・ドイツがパリに迫ってくるまで、ベンヤミンはこれらの資料をパリ国立図書館で書き写したのだった。ほとんどが引用文から成る書物だが、ベンヤミンの引用はあざやかに過去を救済している。本研究との関連でもベンヤミンの仕事は手本となるものであり、『パサージュ論』は19世紀パリの「住む」の変貌史として読むことができよう。鉄という新素材が登場し、それによってパサージュという新たな建造物が建てられ、それとともに人々の「住む」仕方も変わっていく。この歴史的瞬間をベンヤミンの鋭敏な感性はみごとにとらえている。本研究では、20世紀前半のドイツを舞台にして同様の仕事をしようとした。そして、モダニズム建築による新たな「住む」様式とハイデッガー居住論とをつきあわせてみた。本研究者の力量でこれがどこまでできたかはわからないけれども、以下、本研究の具体的な進捗状況を記す。

(3)まず問題になるのは、本研究が哲学外の分野に果敢に挑戦する**学際的**な研究であるということである。ハイデッガー哲学に関する専門図書はすでに豊富に所有しているが、建築関係のものはきわめて乏しい。だから、H. M. Wingler の貴重な資料を駆使した名著 *Das Bauhaus* をはじめとして、ドイツ工作連盟やバウハウスに関係する基本的な研究文献をそろえるところからはじめなければならなかった。申請年度の2009年はちょうどバウハウス創立90周年にあたり、ドイツでは多数の関連図書が出版された。これらのうち、必要と判断される書籍を購入した。モダニズム建築関係の基礎資料をそろえる作業は研究初年度に完了させた。

また、現時点では購入できないような古い書物、たとえば、グロピウスやブルーノ・タウトのドイツ語著作集といったものは、日本の大学図書館でも複写できる可能性がある。今や、こうした情報はインターネットで検索できるのであるから、可能なものは国内での入手をはかった。

(4)しかし、本研究がもっとも重要な情報源と考えたのは、**雑誌**である。雑誌(Zeitschrift)のうちには「時代精神のアクチュアリティ」(ベンヤミン)が宿っている。たとえば、ドイツ工作連盟には機関誌 *Die Form* があつたし、バウハウスには雑誌 *Bauhaus. Zeitschrift fuer Gestaltung* や叢書 *Bauhausbuch* があつた。そのほか参照したい雑誌は多々あるが、モダニズム建築にとって「住宅は住むための機械だ」(ル・コルビュジエ)とみなされていたとするなら、当時の一般の人々や技術者たちが抱懐した技術観についても調べる必要

がある。そのような「技術の哲学」に関わるものとしては、「ドイツ技術者連盟(Verein Deutscher Ingenieure)」の機関誌 *Technik und Wirtschaft*、「ドイツ工学士協会(Verband Deutscher Diplom-Ingenieure)」の *Technik und Kultur* などが参考になる。これらの雑誌のうちに、すでに忘れ去れてしまったのだが、しかし今まさに救済されることを待っている、そんな過去の時代精神からの遺言を発見することができないか、と考えた。

(5)上記のような1920年代、30年代に刊行された雑誌を渉猟するためには、どうしてもドイツに出張し、資料収集のための**現地調査**をする必要がある。古雑誌などの第一次資料が多く保管されているという理由で、訪問先は主として、ベルリン州立図書館(Staatsbibliothek zu Berlin)とライプツィヒにあるドイツ国立図書館(Deutsche Nationalbibliothek)を主に選んだ。また、ベルリンにはバウハウス・アルヒーフ・ムゼウムがあって、資料の閲覧も可能だった。資料を複写するかどうかの選別には、十分な時間をかけた。申請者はドイツの図書館で調べものをするには慣れていますが、それでも稀覯本を閲覧したり複写したりするさいは、係員に依頼しなければならず、即日に対応してくれないケースがふつうなので、調査には時間的な余裕を持つてのぞまなければならない。だから、研究を順調に進展させるためには、ドイツでの滞在期間は長ければ長いほど良い。しかし勤務校の仕事の制約を考慮すると、30日程度の海外出張が妥当なところだろう。この国外現地調査を年1回実施し、所期の目的を果たした。

4. 研究成果

(1)本研究は、「住む」ことを学ぶために、ハイデッガー居住論をその時代から、当時まさに勃興しつつあったモダニズム建築との関連のもとで考察しようとした。すなわち本研究は、これまでほとんど前例のない、哲学と建築史との学際的研究をめざしてきた。この趣旨に沿って、補助期間中は欧州への長期出張をおこない、モダニズム建築の現地調査、関連文献の収集に従事してきた。本研究は、以下のような特色ある研究成果をあげることができたと考えることができる。

a) 本研究の学術的な特色および独創的な点は、ハイデッガー居住論を**新歴史主義的**にその時代という巨大な物語テキストのなかから、すなわち、当時のモダニズム建築との関連のもとで把握しようとするところにあった。管見では、類似した先行研究はない。

b) 同時に、本研究は**実証的**な研究である。

思想を生きた歴史的現実のなかから理解するために、ドイツ工作連盟、バウハウスに關係する歴史的第一次資料を調査した。c)ハイデッガー居住論はその詩的性格から、現実性を欠いた抽象的なものとして非難されることが多い。しかし本研究のような主題設定であれば、「住む」ことに関する**具体的**な議論が可能であり、ハイデッガー居住論の新生面を切りひらくことができた。

(2)本研究は、上記の研究方法に基づき、何本かの論文をこれまで執筆してきたが、各界からの大きな反響があった。なんといいても、哲学と建築史との学際的研究というテーマはユニークで、注目をあびることもなった。その具体的な成果に、代表的なものとして、以下のものがある。

まず、2010年9月18日、早稲田大学で開催されたハイデッガー・フォーラム第5回大会「建てること、住むこと、考えること」において、「住むことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築」という研究発表を行った。これを大幅に加筆修正した論文「住むことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」が、日独文化研究所年報『文明と哲学』第5号(こぶし書房、2013年)に掲載されている。さらに、法政大学出版局から2014年に出版予定の『ハイデッガー読本』において、「世界に住むということ——〈物〉〈建てる、住む、考える〉〈詩的に人間は住む〉」という章を、本研究者が担当することになっている。

また、共著で、『新しい時代をひらく——教養と社会』(角川学芸出版、2011年)を上梓した。同書のうち、本研究者担当部分は、第5章「技術時代における教養——技術文化への包括的な批判——」であり、モダニズム建築と密接な関連のある「技術文化」について、包括的な批判を展開した。

以上のように、本研究は科学研究費補助金の支援を受け、適切に研究を遂行し、その研究成果を着実におさめることができたと言えよう。

(3)ハイデッガーは『建てる、住む、考える』のなかで、「建てる=建築」と「考える=哲学」の両者を、ともに「住む」に基礎づけようとした。ハイデッガー的な「住む」の根本動向が大地・天空・神々・人々の四者をたがいに「思いやる」ことであるかぎり、「住む」による建築と哲学の基礎づけはその両者の倫理性を問題にすることにほかならない。「住む」ことができるという基本的な「**倫理**」を尊重しようとするところこそ、この大地うえに人間が住めなくなる危険をはらんだ今日における喫緊の課題であって、今後さらに究明してい

く必要があるといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 稲田知己、「哲学と建築との学際的研究」、津山工業高等専門学校紀要、第53号、pp.21-31, 2011、査読有
- ② 稲田知己、「住むことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」、日独文化研究所年報『文明と哲学』(こぶし書房)、第5号、pp.216-235、2013、査読有

[学会発表] (計2件)

- ① 稲田知己、「住むことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」、ハイデッガー・フォーラム第5回大会、2010年9月18日、於早稲田大学
なお、この発表原稿は、電子ジャーナル『Heidegger-Forum』Vol.5誌上で公開中
(<http://heideggerforum.main.jp/ej5.html>)
- ② 稲田知己、「住むことを学ぶ——ハイデッガー居住論とモダニズム建築——」、岡山哲学研究会第8回例会、2010年9月25日、於岡山大学

[図書] (計1件)

- ① 稲田知己 (ほか7名)、『新しい時代をひらく——教養と社会』、角川学芸出版、2011、総ページ数206頁のうち、稲田担当部分はpp.127-151、「技術時代における教養——技術文化への包括的な批判——」と題された第5章が該当

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲田 知己 (INADA TOMOMI)

独立行政法人国立高等専門学校機構・
津山工業高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号：70221788